

Café des open



三浦一族

Menu 第15回

奥州合戦と三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

源平合戦において、目覚ましい活躍をした源義経は、元暦2年（1185）5月、鎌倉に帰還しようとしませんが、兄の源頼朝はその鎌倉入りを拒絶したとされます。頼朝は、義経が自らの許しを得ず、独断で朝廷から任官したことを問題視していました。東国に武家政権を設立しようとしていた頼朝は、鎌倉方の武士が任官を受ける際は自らの推挙を得ることと定めており、義経の行動はこれに反するものでした。それに加え、義経は梶原景時ら関東の御家人と対立し、義経の専横にも厳しい目が向けられ、頼朝の不興をかいました。こうしたことから、頼朝は御家人らに義経に従ってはならないと命じ、義経が戻ってきて鎌倉入りすることを許さなかったとされます。

結果、帰洛せざるを得なくなった義経は、朝廷から頼朝追討の宣旨を得ますが、思うように軍勢が集まらず、逆に頼朝に義経追討の宣旨が下ることとなり、義経は朝敵となりました。追われる身となった義経は、縁のあった平泉の奥州藤原氏のもとに逃れます。しかし、頼りとしていた奥州藤原氏3代の秀衡が文治3年（1187）10月に亡くなると、翌年、子の泰衡に義経追討の宣旨が下されました。再三の宣旨もあり、圧力に耐えかねた泰衡は、文治5年（1189）閏4月30日、館を襲撃し義経を自害に追い込みました。

こうして義経を討ち果たした泰衡でしたが、同年6月、頼朝は奥州藤原氏に対する追討の宣旨を朝廷に要請します。朝廷はこの追討には消極的で宣下を行いませんでしたが、頼朝は奥州への出陣を決断し、同年7月19日、頼朝は多くの御家人らとともに鎌倉から進発しました。この軍勢のなかには、和田義盛のほか、惣領三浦義澄や子の義村、佐原義連ら三浦一族が含まれていましたが、なかでも義盛の働きは顕著なものでした。出陣に際し、義盛は梶原景時とともに奥州追討のため、鎌倉に集結した諸士らの交名を作成し頼朝に提出していた他、頼朝から武蔵国・上野国の武士らに対する指示を命じられました。また、これ以前、自害した義経の首が鎌倉に運ばれた際も、義盛はその首実検を担当していました。

一方、合戦の場における義盛の活躍を示すのが、同年8月9日～10日にかけて行われた阿津賀志山（あつ

かしやま）の合戦（福島県国見町付近）です。奥州藤原氏は、鎌倉方の大軍を迎え撃つべく、阿津賀志山に全長3キロメートルに及ぶ二重の堀と三重の土塁を設けた防塁を構築しますが、鎌倉方はこれを打ち破りません。敵方の武将藤原国衡（泰衡の兄）は逃れていきますが、頼朝は後を追うように指示し義盛がこれに追いつきました。義盛は国衡と対峙し、国衡を矢で射抜きます。しかし、実際に頼朝に国衡の首を献上したのは義盛と同じ戦場にいた畠山重忠でした。重忠の軍勢が国衡と義盛との間に分け入り、配下の者が国衡の首を獲ったことから、重忠は自らの功を主張します。一方、その場にいた義盛もすぐさま頼朝の御前で反論し、首を献上したのは確かに重忠であるが、それ以前に自らの矢で国衡を射抜いており自分の手柄であると主張します。結局、この一件は義盛が射た矢が貫通したことは明らかで、重忠は矢を放たなかったことを認めため、義盛の手柄として落着くこととなりました。阿津賀志山の合戦で勝利した鎌倉方の軍勢は、同月22日には奥州藤原氏の都である平泉を落とし、当主泰衡は自らの郎従に殺害され、奥州藤原氏は滅亡しました。



永福寺跡（鎌倉市）

奥州合戦では、追い詰められた泰衡が平泉を離れる際、宝蔵などに火を放ったため、栄華を誇った奥州藤原氏の多くの旧跡や宝物等が焼失しました。一方で、没収された様々な宝物は、鎌倉方の武士らに分配されていたとみられます。『吾妻鏡』建暦元年（1211）5月10日条には、平泉で没収された奥州藤原氏の重宝がその時供奉していた宿老らに分配されていたことを知った3代将軍源実朝が義盛に命じ、それぞれが有している秘蔵物を召し出させたとの記述が残されています。実際には、すでにその多くが紛失状態となっており、一部のみしか進上されなかったようですが、合戦後、多くの奥州藤原氏の宝物が、関東に流れていった様子が窺えます。

奥州合戦後、頼朝は、義経と奥州藤原氏の鎮魂のため、鎌倉に永福寺（ようふくじ）を建立しました。その後、三浦義澄や義村は、2代にわたり、同寺の奉行をつとめるなど、永福寺は三浦一族にとっても所縁の深い寺院となっていきました。

* 次回、2023年9月号の「Café des 三浦一族」はお休みです